

特発性心筋症に関する調査研究

研究要旨

本研究班は、1974年に旧厚生省特定疾患調査研究班として、特発性心筋症の疫学・病因・診断・治療を明らかにすべく設立され、その後約40年間継続して本領域での進歩・発展に大きく貢献してきた。本研究は、心筋症の実態を把握し、日本循環器学会、日本心不全学会と連携し診断基準や診療ガイドラインの確立をめざし、研究成果を広く診療へ普及し、医療水準の向上を図ることを目的とした。研究班による全国規模での心筋症のレジストリー、特定疾患登録システムの確立を推進準備し、心筋症をターゲットとした登録観察研究であるサブグループ研究を開始し、登録をすすめた。また、研究成果の社会への還元として、ホームページ公開や市民公開講座を行った

A. 研究目的

頻脈性心房細動を合併した急性心不全において、低用量ランジオロール（静注用 β 1遮断）にて心拍数コントロールすることが血行動態を改善させることを明らかにする。

B. 研究方法

頻脈性心房細動を合併した重症心不全患者（NYHA IV度、左室駆出率 \leq 35%）を対象に、スワン・ガンツカテーテルを留置し、利尿薬、血管拡張薬、PDIII 阻害薬を投与後、ランジオロール0~6 μ g/kg/minを追加投与し、血行動態の変化を検討した。本研究の主要評価項目は、ランジオロールが肺動脈説入圧と心係数を改善させる投与量を明らかにすることである。

（倫理面への配慮）

患者の名前は匿名化され、そのデータは、名前や個人を特定できないように個人情報の秘密は厳重に守られ、第三者には絶対わからないように配慮してある。

C. 研究結果

低用量ランジオロール1.5 μ g/kg/minは、有意に徐拍効果（-20%）を認め、肺動脈楔入圧は有意に低下、心係数は有意に増加した。ランジオロール4.5 μ g/kg/min以上では、肺動脈楔入圧は増加、心係数は低下する傾向を認めた。

D. 考察

研究により得られた成果の今後の活用・提供：日本循環器学会の急性・慢性心不全診療ガイドライン（2018年改訂版）で、頻脈性心房細動を合併した心不全にランジオロールによる心拍数コントロ

ールは、クラスIに推奨されているが、具体的な投与量や使い方に関しては、未だ明らかではない。本研究では、低用量ランジオロールが、安全かつ有効な徐拍効果と血行動態の改善を来すことを明らかにした。

E. 結論

頻脈性心房細動を合併した急性心不全において、低用量ランジオロールは、安全に心拍数を徐拍化し、血行動態的に肺動脈説入圧と心係数を改善させる。

F. 健康危険情報

なし

G. 学会発表

1. 論文発表

Kobayashi S, Myoren T, Kajii T, Kono M, Nanno T, Ishiguchi H, Nishimura S, Fukuda M, Hino A, Fujimura T, Ono M, Uchinoumi H, Tateishi H, Mochizuki M, Oda T, Okuda S, Yoshiga Y, Kawano R, Yano M. Addition of a β 1-blocker to milrinone treatment improves cardiac function in patients with acute heart failure and rapid atrial fibrillation. *Cardiology* (Kager), in press.

2. 学会発表（発表誌面巻号・ページ・発行年等も記入）

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定も含む）

1. 特許取得

なし

2. 実用新案登録

なし